

1 炭疽病（萎凋性炭疽、葉枯炭疽）

A 生態と防除のねらい

- 1 本病には、萎凋性炭疽（病原菌はグロメレラ シングラータ）と葉枯炭疽（病原菌はコレトリカム アクテータム）がある。
- 2 伝染源は保菌親株が主であるが、土壤中に残存して伝染することも考えられるので、親株は無病ほ場から選び、前年発生の見られたほ場は、親株床や育苗床として使用しない。
- 3 発病適温は、萎凋性炭疽が30℃、葉枯炭疽が25～26℃で、発生時期は葉枯炭疽がやや早い。
- 4 症状は、どちらもランナーや葉柄にややくぼんだ紡錘形の病斑を形成する。異なるのは、前者は高温時に萎凋症状を呈し枯死するが、後者は新葉の葉枯症状が激しく、生育不良となるがクラウン部は侵されないため枯死はしない。
- 5 親株床から本ぼ定植後まで発生し、降雨、特に風を伴うような雨の後に多発する。発病を防止するには親株床から雨よけを行い、健全株を育苗することが重要である。薬剤防除はランナー伸長初期から本ぼ定植までの間に重点を置く。風雨の後は必ず防除を行う。

萎凋性炭疽



B 耕種的防除法等

- 1 親株床、育苗床は雨除け栽培を行う。
- 2 親株は購入するか、無病ほ場から選抜する。
- 3 無病親株から採苗し、育苗床は汚染の危険が少ないほ場を選ぶ。
- 4 本ぼ植え付け時には健全苗を厳選し、密植をさけ、適度の栽培密度とする。
- 5 被害株は隣接株も含め早めに処分する。
- 6 雨除けと底面給水を組み合わせた育苗や高設育苗は発病を抑える。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

生物農薬は、他剤と混用すると成分に影響するので、単剤使用を基本とする。

2 輪斑病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は被害部に形成した柄子殻で越冬し伝染源となる。発生は梅雨期から10月までの高温期に多く、この間降雨が多いと多発しやすい。育苗床で被害が大きいが、定植後の発生は少なくなる。
- 2 発病初期から薬剤防除を実施するとともに被害葉はイチゴの生育に支障のない範囲で摘除し処分する。

B 耕種的防除法等

- 1 無病親株から採苗する。
- 2 被害葉は早めに除去する。
- 3 不要な下葉を取除き通風を良くする。

3 疫病

A 生態と防除のねらい

- 1 主として育苗床で発生し、夏期高温時に発生が多い。イチゴの株全体を侵すが、特にクラウン部が侵されると萎凋、枯死する。
- 2 病原菌は土壌伝染するので、育苗床は汚染していないほ場を選ぶ。また、水媒伝染するので畦面、畦間に水がたまらないようにする。かん水は土壌が飛び散らないように丁寧に行う。
- 3 ナス、トマトの果実や苗等も侵す多犯性の菌なので、ナス、トマトの近くに育苗床を設けないようにする。

B 耕種的防除法等

- 1 無病ほ場から採苗する。
- 2 高畦にし、ほ場の排水を良くする。
- 3 育苗床では風通に留意し、適切な配置にする。
- 4 被害株は隣接株を含め早めに除去、処分する。

4 うどんこ病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は親株を通じて苗に伝染し、イチゴの植物体上だけで生活を繰り返す。夏期高温時には停滞するが、栽培期間を通じ発生し、曇雨天気味で比較的高温（発病適温 20℃前後）の天候が続くと多発しやすい。
- 2 親株は無病ほ場から選び、育苗期から定期的に薬剤防除を実施するが、本ぼにおいては活着後から開花期前までの防除に重点を置く。
- 3 一度多発すると防除が極めて困難なため、初期防除を徹底する。
- 4 花芽分化促進のための株冷（低温暗黒処理）は、普通育苗に比べ本病の発生が助長されるので処理前の防除を徹底する。



B 耕種的防除法等

- 1 親株は無病ほ場から選ぶ。
- 2 草勢の低下を防止するため適正な施肥を行う。
- 3 ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。
- 4 施設栽培では通風換気に努める。
- 5 発病果、発病葉は早めに取除き処分する。
- 6 葉が繁茂しすぎないように下葉かきを頻繁にする。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

- 1 同一系統薬剤を連用すると薬剤耐性菌が生じやすいので、他剤とのローテーション散布を行う。
- 2 生物農薬は、他剤と混用すると成分に影響するので、単剤使用を基本とする。

5 芽枯病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は菌糸、菌核の形で土壌伝染するほか苗で伝染する。本ぼ定植後、活着時からの発生が多く、また、2～3月の外気温が低く換気が不十分で、施設内が多湿状態のときに多発しやすいので除湿対策が重要である。
- 2 繁茂し、芽や葉が軟弱なとき発生しやすい。

B 耕種的防除法等

- 1 親株は無病ほ場から選ぶ。
- 2 ほ場の排水を良くし、かん水過多を避ける。
- 3 できるだけ換気を図り、施設内の加湿防止に努める。
- 4 繁茂しすぎたときは、下葉の除去を行い、通風を良くする。

6 灰色かび病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は多くの種類の作物を侵し、被害部の菌糸や菌核で越冬する。
- 2 気温が20℃前後で多湿の時に発生が多い。葉が混みすぎたり、枯死葉などがあると発病を助長するので、施設内の除湿に努め、不要な下葉は早めに除去する。
- 3 薬剤防除は予防に重点を置くが、薬剤防除だけでは完全に防ぐことができないので、耕種的な対策を含めた総合防除を行う。

B 耕種的防除法等

- 1 り病果や病葉は早めに除去し処分する。
- 2 ほ場の排水を良くし、換気を図る。
- 3 プラスチックフィルムでマルチする。
- 4 枯死葉や混みすぎた葉は下葉から摘除する。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

- 1 同一系統薬剤を連用すると薬剤耐性菌が生じやすいので、他剤とのローテーション散布を行う。
- 2 生物農薬は、他剤と混用すると成分に影響するので、単剤使用を基本とする。

7 萎黄病

A 生態と防除のねらい

- 1 本病は土壌伝染と栄養繁殖による苗伝染により発生するので、親株は無病ほ場から選び、親株床、育苗床とも無病ほ場に設ける。
- 2 り病苗の持ち込みによる伝染が大きいので、苗をよく選別し、本ほに持ち込まないようにする。
- 3 やむを得ず発病ほ場に植え付ける場合は、植え付け前に土壌消毒を行う。夏期高温時にハウス密閉による太陽熱消毒も有効である。

小葉が奇形・小型化する



クラウン内の維管束部は褐変している



B 耕種的防除法等

- 1 発病株から親株をとらない。
- 2 被害株は除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- 3 前年にり病が確認されたポット等は、十分に洗浄して土壌の付着を落とし、ケミクロンG等を用いて消毒する。なお、消毒作業には手袋を使用し、廃液は用水路等に流さず、適切に処理する。
- 4 太陽熱消毒を行う。

8 イチゴメセンチュウ、イチゴセンチュウ

A 生態と防除のねらい

- 1 イチゴメセンチュウ、イチゴセンチュウの被害は萌芽期に最も著しく、芽や花に障害を起し、収穫に影響する。高温時に症状が現れやすい。
- 2 主としてランナーによって親株から子苗に伝播するが、多雨の場合には水によっても伝播する。
- 3 被害株を発見した場合は、早めに薬剤散布する。

B 耕種的防除法等

健全株を親株に用い、採苗する。

9 ハダニ類（ナミハダニ、カンザワハダニ）

A 生態と防除のねらい

- 1 本ぼでの発生は主に寄生苗の持ち込みによって起こるので、定植前に育苗期の防除を徹底する。
- 2 発生初期は地面に接した下葉に寄生しているので、この時期に下位葉を重点に防除を行う。
- 3 下葉かぎ後の葉数が少ない時期に薬剤散布を行うと、葉裏にも薬剤がかかりやすく、効果が高くなる。
- 4 定植時とビニル被覆時には、薬剤による防除を行う。
- 5 栽培期間を通しての防除の考え方は、下記のとおりである。
 - 1) 時期別の防除のねらい
 - 育苗期 : 殺ダニ剤のみに依存せず、気門封鎖剤などを利用して、ハダニ密度を抑える。
 - 定植期 : 定植期前後には、ハダニ密度を「ゼロ」に抑制する。
 - 定植後～年内 : ハダニ密度を抑えた上で天敵放飼を行い、ハダニ密度を低レベルに維持する。
 - 年明け以降 : ハダニ密度上昇期となるため、ハダニ密度を抑えた上で天敵を追加放飼する。
 - 収穫終了期 : 天敵利用を終了し、薬剤によるハダニ防除により本ぼのハダニ密度を確実に抑制する。
 - 2) 防除対策
 - ・基本的対策として、耕種的防除を徹底する。ほ場内の雑草を除去し、除去した下葉をほ場外で適切に処分する。
 - ・薬剤散布前には、必ず不要な下葉を除去する。
 - ・ほ場内を見回り、初期防除を徹底する。
 - ・気門封鎖剤などを積極的に活用する（殺ダニ剤のみに依存しない）。
 - ・育苗ほから本ぼ、または、本ぼから育苗ほへハダニを持ち込まない。

ハダニによる被害



B 耕種的防除法等

- 1 ほ場周辺の雑草は発生源となるので、除草を徹底する。
- 2 発生初期の下葉の除去はハダニ防除に有効である。除いた下葉はポリ袋などに詰め、ハウス外に持ち出して処分する。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

- 1 茎葉散布、くん煙処理
 - 1) 同一系統の薬剤を連用すると、薬剤感受性が低下するので、系統の異なった薬剤を組み合わせ、ローテーション散布を実施する。

(参考) 各種殺ダニ剤の効果 ※農薬メーカー資料等を参考に作成

IRAC コード	農薬名	効果のあるハダニ類のステージ等
20B	カネマイトフロアブル	各生育ステージ（卵、幼虫、若虫、成虫）に効果あり。
6	コロマイト乳剤	各生育ステージ（成虫、幼虫及び卵）に活性あり。

25A	スターマイトフロアブル	各生育ステージ（卵、幼虫、若虫、成虫）に効果あり。
25A	ダニサラバフロアブル	全ステージに活性あり。特に幼虫に対して効果が高い。
25B ・21A	ダブルフェースフロアブル	各生育ステージ（卵、幼虫、若虫、成虫）に効果あり。
12D	デデオン乳剤	殺成・幼虫力はあまりない。ふ化直後の幼虫には効果あり。雌成虫に施薬すると、それから生まれる卵はふ化しなくなる。
10B	バロックフロアブル	殺卵活性あり。卵のふ化阻止作用及び幼虫・若虫に対する脱皮阻害作用あり。
20D	マイトコーネフロアブル	成虫、幼虫、卵に活性を示す。

2) 有効な殺ダニ剤を本ぼ期に温存するため、育苗期や本ぼでの天敵放飼前には、気門封鎖剤を積極的に使用する。また、ハダニ類の本ぼでの初発時や局所的な発生時には、気門封鎖剤によるスポット散布が有効である。

2 生物農薬(天敵)

- 1) カブリダニ類は生存日数が短いので、入手後直ちに使用し、使い切る。
- 2) 容器内でカブリダニ類が偏在していることがあるので、使用の際は容器を横にしてゆっくりと回転させて均一に混在させた後、所定量を葉の上に容器から少量に分けて散布し、放飼する。
- 3) ハダニ類の密度が高まってからの放飼は十分な効果が得られないことがあるので、ハダニ類の発生初期から1～2週間間隔で数回放飼する。
- 4) 放飼はできるだけ均一に行うが、ハダニ類の発生にむらがあるときには発生の多いところに重点的に放飼を行う。
- 5) 薬剤の中にはカブリダニ類の活動に影響を及ぼすおそれがあるものもあるので、放飼前後は影響の少ない薬剤と体系的に使用する。

3 高濃度二酸化炭素くん蒸

- 1) 気密性の高い倉庫や天幕、専用のくん蒸資材を用い、50～60%の二酸化炭素濃度を24時間維持し、くん蒸処理する。
- 2) 定植前（2～3日以内）の苗を処理する。
- 3) 薬害の助長や防除効果の低下を招くため、処理直前には散水しない。
- 4) 本剤は残効が無いため、定植後の持ち込みに注意する。
- 5) くん蒸期間中は、内部温度を30℃に維持する。
- 6) くん蒸期間中は、内部に立ち入らない。
- 7) 定植後、外から1～2枚の展開葉が赤く変色するが、その後の生育への影響は少ない。

高濃度二酸化炭素ガス充填装置の設置状況



くん蒸処理時のイチゴ育苗株（定植前）



○栽培期間を通しての防除の考え方

農薬を主体とした防除対策

ステージ	育苗期			本ほ期		
	前期	中期	後期	ビニル被覆前	年内	年明け後
目安時期	鉢受け～6月上旬	6月中旬～7月下旬	8月上旬～定植	定植～10月	11月～12月	1月～収穫終了
耕種的防除等	<ul style="list-style-type: none"> 育苗ほ作業順序の優先 本ほ残渣の適正処分 ほ場内、周辺の除草 苗間隔広げ（苗切り離し後） 	<ul style="list-style-type: none"> ほ場内、周辺の除草 下葉の除去 苗間隔広げ（苗切り離し後） 	<ul style="list-style-type: none"> ほ場内、周辺の除草 下葉の除去 発生箇所を確認・目印付け（収穫や管理作業時） 	<ul style="list-style-type: none"> ほ場内の除草 老化葉の除去 ハダニ類が寄生した葉の除去（施設外で適正に処分する） 発生箇所の確認・目印付け（収穫や管理作業時） 	<ul style="list-style-type: none"> ほ場内の除草 老化葉の除去 ハダニ類が寄生した葉の除去（施設外で適正に処分する） 発生箇所の確認・目印付け（収穫や管理作業時） 	<ul style="list-style-type: none"> 1月～収穫終了
農薬を主体とした防除	<ul style="list-style-type: none"> 気門封鎖剤を主体に散布 〔効果の高い殺ダニ剤は極力使わず〕 〔本ほでの防除に用いる〕 	<ul style="list-style-type: none"> 気門封鎖剤の重点散布 (連続4回程度) 	<ul style="list-style-type: none"> 効果の高い殺ダニ剤の散布 気門封鎖剤によるスポット散布 	<ul style="list-style-type: none"> 殺ダニ剤のローテーション散布 (事前に不要な葉を除去する) 気門封鎖剤によるスポット散布 	<ul style="list-style-type: none"> 殺ダニ剤のローテーション散布 (事前に不要な葉を除去する) 気門封鎖剤によるスポット散布 	

※気門封鎖剤：4～7日間隔で連続散布を行う。夏季やハダニ類の密度が高い場合は散布間隔を短くする。

天敵（カブリダニ類）を主体とした防除対策

ステージ	育苗期			本ほ期			
	前期	中期	後期	ビニル被覆前	年内	年明け後	
目安時期	鉢受け～6月上旬	6月中旬～7月下旬	8月上旬～定植	定植～10月	11月～12月	1月～収穫終了	
耕種的防除等	<ul style="list-style-type: none"> 育苗ほ作業順序の優先 本ほ残渣の適正処分 ほ場内、周辺の除草 苗間隔広げ（苗切り離し後） 	<ul style="list-style-type: none"> ほ場内、周辺の除草 下葉の除去 苗間隔広げ（苗切り離し後） 	<ul style="list-style-type: none"> ほ場内、周辺の除草 下葉の除去 苗間隔広げ（苗切り離し後） 	<ul style="list-style-type: none"> ほ場内、周辺の除草 下葉の除去 発生箇所を確認・目印付け（収穫や管理作業時） 	<ul style="list-style-type: none"> ほ場内の除草 老化葉の除去 ハダニ類が寄生した葉の除去（施設外で適正に処分する） 発生箇所の確認・目印付け（収穫や管理作業時） 	<ul style="list-style-type: none"> ほ場内の除草 老化葉の除去 ハダニ類が寄生した葉の除去（施設外で適正に処分する） 発生箇所の確認・目印付け（収穫や管理作業時） 	<ul style="list-style-type: none"> 1月～収穫終了
天敵を主体とした防除	<ul style="list-style-type: none"> 気門封鎖剤を主体に散布 〔効果の高い殺ダニ剤は極力使わず〕 〔本ほでの防除に用いる〕 	<ul style="list-style-type: none"> 気門封鎖剤の重点散布 (連続4回程度) 	<ul style="list-style-type: none"> 【ハダニ類がみられる場合】 気門封鎖剤の重点散布 (連続4回程度) 殺ダニ剤の散布 (事前に不要な葉を除去する) 天敵への影響日数を考慮する 	<ul style="list-style-type: none"> 【ハダニ類がみられる場合】 天敵に影響の少ない殺ダニ剤の散布 (事前に不要な葉を除去する) 気門封鎖剤によるスポット散布 	<ul style="list-style-type: none"> 天敵に影響の少ない殺ダニ剤の散布 (事前に不要な葉を除去する) 	<ul style="list-style-type: none"> 【ハダニ類がみられる場合】 天敵に影響の少ない殺ダニ剤の散布 (事前に不要な葉を除去する) 天敵追加放飼 	

※気門封鎖剤：4～7日間隔で連続散布を行う。夏季やハダニ類の密度が高い場合は散布間隔を短くする。

【多発した場合】
天敵を主体とした防除から農薬を主体とした防除に切り替える。
具体的には、効果の高い殺ダニ剤を使用、一旦確実に密度を減らす。その上で殺ダニ剤のローテーション散布を行う(農薬を主体とした防除対策参照)。

10 アザミウマ類

1) ミカンキイロアザミウマ

A 生態と防除のねらい

- 1 本種の寄生植物は、ガーベラ、キク、バラなどの花き類、イチゴ、トマト、メロンなどの野菜類、ミカン、モモ、ブドウなどの果樹類など多岐にわたる。
- 2 花に本種の成虫、幼虫が多数寄生すると、果実が着色不良や褐色になり、光沢のない果実となる。
- 3 雌成虫の体長は、1.4～1.7mm程度である。体色は、明黄色～褐色と変異が大きいため、体色で種の判別を行うことは困難である。
- 4 本種に対する有効な薬剤が少ないため、防除にあたっては発生している種を見分けることが必要である。本種は、複眼後方の第4刺毛が目立って長いので、実体顕微鏡等で観察すると他の種と見分けることができる。
- 5 本種の産卵、発育には花粉が大きく関与するため、花への寄生が多い。
- 6 1世代に要する期間は、15℃で約34日、20℃で約20日、25℃で約12日と短い。雌の産卵数は、1頭当たり150～300個である。
- 7 本種は、冬季も露地のキク親株床や雑草で成幼虫が観察される。
- 8 成虫は、青色、黄色、白色に誘引される。

B 耕種的防除法等

- 1 ほ場周辺の雑草は、発生源、越冬源となるので除草を徹底する。特に、開花中の雑草には、成虫が飛来、寄生するので除去する。
- 2 本種の成虫は花に多く集まるので、花を注意深く観察し早期発見に努める。
- 3 青色、黄色などの粘着トラップを設置し、発生時期、発生量の把握に努める。

2) ヒラズハナアザミウマ

A 生態と防除のねらい

- 1 本種は、イチゴをはじめトマト、メロン、ネギ類など多様な作物に寄生加害する。
- 2 成・幼虫ともに花に寄生し、花弁やがくの基部および花たくの表面を食害する。
- 3 本種に吸汁加害された幼果は光沢を失って果皮は褐変、肥厚する。また、種子間の果面の凹んだ肥大不良果や、部分的な着色不良果となり、商品価値がなくなる。
- 4 雌成虫の体長は1.5mm、体色は淡褐色ないし暗褐色である。雄成虫の体長は1.1mm、体色は黄色である。
- 5 本種は成虫で越冬し、春から秋まで花に多く見られる。年間発生回数は、温暖地では10世代前後を繰り返す。
- 6 1世代に要する期間は、15℃で約34日、20℃では約20日、25℃では約10日である。雌の産卵数は、15℃で約190卵、25℃で約500卵と他のアザミウマに比べて大変多い。
- 7 本種は、冬季も露地のキク親株床や雑草で成幼虫が観察される。
- 8 成虫は、青色に誘引される。

B 耕種的防除法等

- 1 ほ場周辺の雑草は、発生源となるので除草を徹底する。特に、開花中の雑草には、成虫が飛来、寄生するので除去する。
- 2 本種の成虫は花に多く集まるので、花を注意深く観察し早期発見に努める。
- 3 青色の粘着トラップを設置し、発生時期、発生量の把握に努める。

3) チャノキイロアザミウマ

A 生態と防除のねらい

- 1 本種は、カンキツ、カキなどの果樹、チャ、イヌマキ、サンゴジュ、アジサイなどの木本類で発生が多い。ほ場周辺にこのような植物が多いと発生も多くなり、これらの植物に近い部分ほど発生が多くなる傾向がある。
- 2 芯葉部に寄生し加害する。展開した葉は葉脈に沿って黒褐色になり、ひどくなると葉全体が黒変して株が衰弱し、枯死する場合がある。
- 3 雌成虫の体長は0.8～1.0mm、体色は黄色。雄成虫の体長は0.7～0.8mm、体色は雌とほぼ同様である。
- 4 本種は成虫で越冬する。3月中旬～5月中旬に越冬世代成虫が発生し、11月中旬まで年間に7～8回発生する。
- 5 1世代に要する期間は、16℃で約31日、20℃では約16日、27℃では約11日である。1雌当たりの産卵数は30～40である。
- 6 成虫は、黄色に誘引される。

B 耕種的防除法等

- 1 ほ場周辺の雑草は、発生源となるので除草を徹底する。
- 2 展開直後の新葉で葉脈に沿った部分が黒く汚れた状態になっていたら、未展開の葉の隙間などをルーペで観察し、早期発見に努める。
- 3 黄色の粘着トラップを設置し、発生時期、発生量の把握に努める。

11 オンシツコナジラミ

A 生態と防除のねらい

- 1 高冷地のイチゴ栽培で発生が多い。
- 2 広食性の害虫で野菜ではトマト、ナスなど約25種類で発生がみられる。成虫は葉裏に群がって吸汁して盛んに産卵する。ふ化幼虫は活動するが、2齢以降はカイガラムシのように固着する。4齢幼虫を通常蛹と呼んでいる。
- 3 卵から成虫までの発育期間は24℃で約25日、27℃では約21日で夏季の高温時には増殖が抑制される。
- 4 野外では年間6～7世代を経過すると推測される。
- 5 被害としては、吸汁害よりも成幼虫及び蛹が排泄する甘露が茎葉に付着し、その付着物にすす病が発生して作物の光合成を著しく阻害する。
- 6 防除は生息密度が高くなると困難になるので、初期防除の徹底を心掛ける。
- 7 成虫や幼虫などの発育ステージによって有効薬剤が異なるので、薬剤の選択には注意する。

B 耕種的防除法等

- 1 周辺雑草の除去を行う。
- 2 栽培終了後は、ハウス密閉処理を行う（密閉処理の項参照）。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

生物農薬は、他剤と混用すると成分に影響するので、単剤使用を基本とする。

12 アブラムシ類

A 生態と防除のねらい

1) ワタアブラムシ

- 1 新葉、芽部に寄生し、育苗、本ぼを通じて周年発生する。
- 2 本種は、ウイルス病を媒介する。
- 3 定植前まで十分防除を行い、本虫のハウス内への持ち込みを防ぐ。

2) イチゴネアブラムシ

- 1 体色が青緑色で一年中イチゴの地際の茎や根の上部（根冠部）に寄生し、生育は著しく阻害され、苗立ちも悪くなる。特に、初夏の寄生が著しい。
- 2 トビイロケアリなどとの共生関係が密接で、アリはアブラムシの寄生部位を土で覆うことが多い。

B 耕種的防除法等

- 1 本虫の寄生した株をハウス内に持ち込まない。
- 2 発生源になる周辺雑草の除去を行う。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

ワタアブラムシについては薬剤感受性の低下した個体群も見られるので、薬剤防除にあたっては、同一系統薬剤の連用を避ける。

13 ハスモンヨトウ

A 生態と防除のねらい

- 1 イチゴだけでなく、ナス科果菜類、葉根菜類、イモ類、マメ類等多くの作物を加害する。
- 2 3月から成虫の羽化がみられ、8月以降、密度の高まりとともに被害が大きくなる。
- 3 産卵は卵塊で行われ、黄土色の鱗毛で覆われる。若、中齢幼虫は葉の食害が主体であるが、老齢幼虫は果実を食害するので、初期のうちに防除する。
- 4 幼虫はふ化後しばらくは集合して食害するため、被害初期は表皮のみを残したすかし状の葉が見られる。齢期が進むと薬剤の効力が低下するので、このような被害葉が見られたら幼虫の除去や薬剤散布を行う。
- 5 フェロモントラップや被害が比較的早く現れるサトイモ等を指標作物とし、発生時期、量の把握に努める。
- 6 病害虫防除所のホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>) に掲載される情報（トラップデータ等）に留意して適期防除に努める。



B 耕種的防除法等

- 1 見つけ次第、捕殺する。
- 2 ハウス開口部を4 mm目以下の防虫ネットで被覆する。なお、防虫ネット上に産卵しふ化幼虫がネットをくぐり抜けてハウス内に侵入することもあるので、ネット及び植物上の観察を怠らない。

14 コガネムシ類

A 生態と防除のねらい

- 1 イチゴでは、一般に、ドウガネブイブイ、アオドウガネ、ヒメコガネ、アカビロウドコガネが問題となる。
- 2 越冬後の幼虫は親株を加害し、育苗期または本ぼ定植時は新世代幼虫が主体に加害する。
- 3 育苗床、本ぼ定植時に幼虫による加害が著しいので、本ぼに持ち込まないようにする。